

昭和16年頃



九州大学箱崎キャンパス。中央運動場の左にあるのが理学部（木造平屋）である。第1回例会はここで開催された。（18頁参照。写真集九州大学史 1911-1986 より。）

昭和21年9月



九州大学理学部物理学科西久光教授退官記念写真。丁度第1回例会が開かれた頃である。氏名については4頁参照(岡崎篤氏提供)。

昭和29年9月

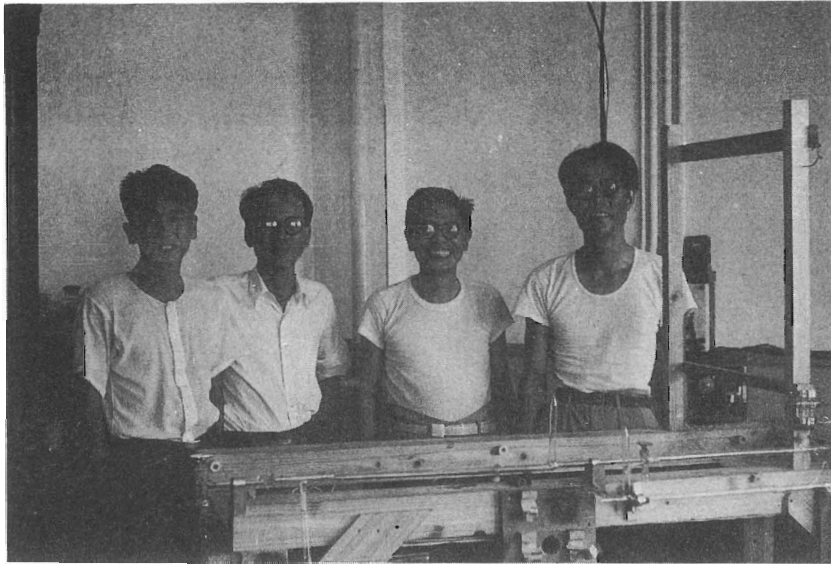
文部省在外研究（短期）で滞英中の岡崎篤義教授に留守部隊から届けた一連の写真。(岡崎篤氏提供・説明)



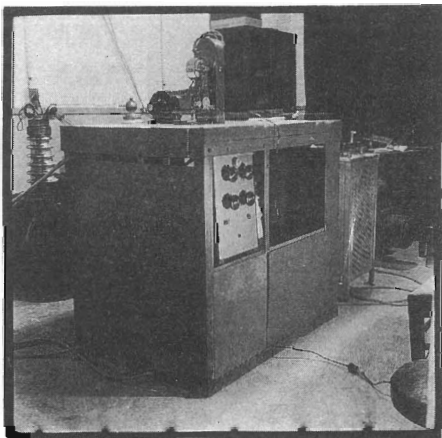
(1) 半導体グループ（官制上は、第4および第5講座のメンバーの一部）。前列左から、橋本公夫助手、平川金四郎助手、岡田利弘助教授、朝鍋静生(M2)、松倉保夫助手、後列左から、平川一美(M1)、岡崎篤(M1)。



(2) 当時の理学部本館を工学部側から見たもの。玄関は、現在の中庭出入口。この状態は、第3期（3年目）の工事が終わったところ。（第1期は左端から窓5個分のみ。したがって、左端の階段は不可欠でした。）本館全体の完成には、さらに3期、6年を要しました。ちなみに、この建物には、いわゆる基礎工事はしてありません。砂の上に載っているだけと言っても良い建物です。6階建の現2号館および3号館の工事では、もちろん基礎工事が行われました。上の写真(1)は、この本館の屋上で撮ったものです。



(3) 半導体実験室. (左から2人目は、来客の教養部坪田弘教授.) この写真は、(1) に登場の、左から朝鍋、岡田、松倉の各氏による電流磁気効果測定装置の立ち上げ作業の様子です. (この年度になって、物理学科の大部分が本館に移動.) 当時、実験室には扇風機も無かったので先生達もこのようなスタイルでした. これは、英国に送る写真なので、少なくとも普段よりひどい格好はしておられないと思います. 暑い季節には、私は研究室に着くと、汗びっしょりのシャツを脱いで上半身裸となり、上から白衣 (現像液のしみで甚だ汚かった) を着て仕事をしました. こうすれば、帰宅の時には乾いたシャツが着れました.



(4) 岡田先生が私のために設置して下さった回転対陰極型X線発生装置 (当時、まだ普及はしていなかった). 理学電機 (株) の大槻敏夫氏 (故人、物理学科第1回卒業) のご好意で、装置の一部 (対陰極部と真空系) のみを購入し、図面を提供して頂いて、本体 (鉄アングル製) は理学部附属工場で作製したもの. トランスは教養部上田幾彦氏からお借りしました. 半導体グループの作った何種類かの化合物半導体、平川金四郎氏のセレン化鉄およびペロブスカイト磁性体、などの単結晶試料に関する構造決定に使用しました. トランスの容量が不十分だったため、対陰極は、実際には回転することなく使命を終えました.

昭和33年7月26日

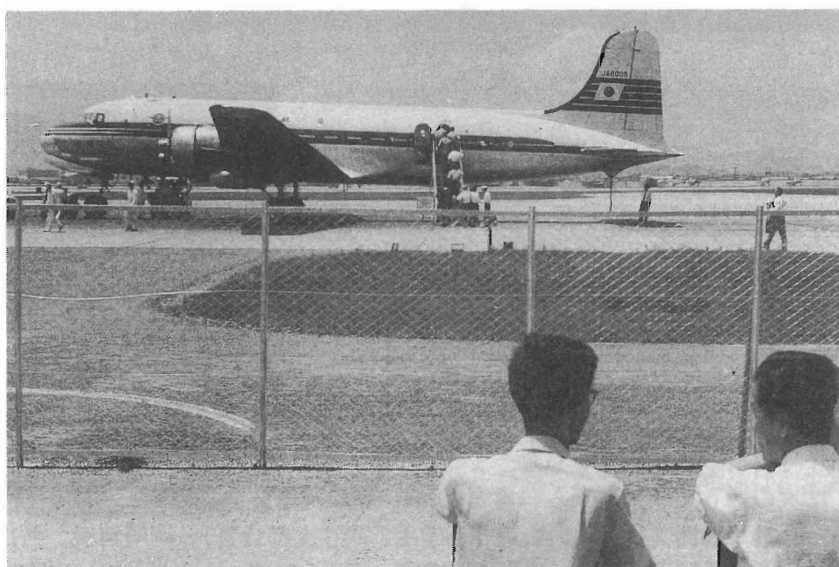


九大山の家にて、岡田利弘先生が、文部省在外研究（長期）で英国 Bristol に行かれることになり、半導体ゼミ（九大理学部、教養部、久留米大学）で、壮行登山を行った時の出発前の記念撮影です。途中までの予定で、ビールだけを持って出かけた方もおられましたが、全員が久住山頂まで往復しました。この時、松村温氏が携帯ラジオを持っておられて、出発直後の急な登りで、Bach の「二つのバイオリンのための協奏曲」を聴かせて下さったのが忘れられません。バスは、豊後中村から筋湯まで通っていましたが、若手は、豊後森で乗り換え、今は廃線となった小国線で宝泉寺まで行き、しばやかた峠を越えて、山の家まで3時間余の道を歩きました。（ここを歩くのは普通のことでした。）メンバー（敬称略）は次の通りです。左から、重富 茂信、平川一美（後）、坪田 弘、岡崎 篤（後）、梅田淳一、橋本薺洲（後）、重富 茂（小学生、現在支部会員）、岡崎篤義、西山昭允（中腰）、鈴木弘道（後）、橋本公夫（後）、岡田利弘、平川金四郎、松村 温（後）。（岡崎篤氏提供）

前頁の登山の山頂でのひとこま。
(平川金四郎氏提供)



昭和35年夏



板付空港にて、米国に出発される岡田利弘先生がタラップの中段辺り。当時、国際線の重要な中継地であった Anchorage でも、機への乗降はこの方式でした。国際線はすでにジェット機時代に入っていました。見送りの後姿、右側は水野善右衛門先生。(岡崎篤氏提供)